長万部の教育コーナー 今、学校では

虫メガネで大発見!! 長万部マリア幼稚園

今年は夏の季節を満喫できなかったので、お天気の良い日には、秋の季節の変化を感じながら思い切り身体を動かして走り回ったり、虫捕りや栗拾いに夢中になったりしている毎日です。そんな中、活躍しているのがサンタさんのお友達のヨンタさんから届いた虫メガネ。全園児が持っているマイ虫メガネを首から下げていざ！探検へゴー！てんとう虫を見つけたり、収穫したトマトを水に浮かばせると水の泡が丸く出たり、沈むものや浮くものを発見したり、みんな虫メガネに夢中です。ちょっと疲れた時は木陰でひと休み。色々なことに興味・関心を持ち、好奇心旺盛な子どもたちの純粋で真っ直ぐな心に探究心が加わり、よりパワーアップしていくことを願って、日々アンテナを巡らせながら、発見が発想に結びついていけるよう過ごしていきたいと思います。

地域と共にある学校づくり 静狩小学校

静狩小学校は地域に根ざし、地域と共にある学校づくりの一環として、地域の方々と連携した収穫祭や敬老会での発表に取り組んでいます。

全校児童が野菜を栽培し、各自が野菜に関するテーマを設定して調べたことをまとめて発表する「収穫祭」を今年も行いました。当日は、保護者や地域の方々をお迎えし、児童がメニューを考えて調理し、昼食の準備を行います。畑作りでお世話になった地域の方々と昼食をいただき、調べ学習の成果をわかりやすく発表しました。

また、静狩地域敬老会にも全校児童が参加しています。色紙の贈り物として、野菜で作ったはんこの配置や色の組み合わせを工夫し、メッセージの言葉を自分でよく考えながら丁寧に仕上げました。

敬老会当日は、毎朝、授業開始時刻の前に取り組んでいる「朝のうた」の時間で練習を重ねてきた合唱も披露し、参加者お一人お一人と児童が握手をする場面も設定していただきました。

これからも、地域と共に児童を育む取組を大切にしながら学校づくりを進めていきます。

キャリア教育の一層の充実を求めて 長万部高等学校

後期がスタートしてすぐに中高合同講演会が長万部中学校体育館で開催されました。北海道教育大学函館校より齊藤征人先生を講師に迎え、「キズナ―人をつなぐ・まちをつくる―」という演題でお話をしていただき、生徒は自分のできることで誰かのためになれるまちづくりを真剣に考えました。

1年生の総合的な学習の時間に行っている「まちづくりプロジェクト」もまちづくりに関する課題設定をし、調査した結果を10月31日㈬の発表会に向けてまとめています。

11月15日㈭には小中高合同での「ふるさと学」の発表会があり、子どもたちは今の学びが、将来長万部町にどう役立つかを発表します。

2年生は9月にインターンシップを行いました。インターンシップ体験発表会には受け入れ先の事業所の方も見え、生徒の発表を聞いていただきました。インターンシップでの自分自身を見つめ、将来への生き方を考える発表内容でした。

3年生は進路実現に向け、就職試験や専門学校、大学の試験に向けて準備をしています。生徒は模擬面接、志望理由書など先生方からのアドバイスに対しても熱心に耳を傾け、積極的に取組んでいます。

長万部小学校

写真で見る学校の様子

学芸会～日頃の成果を発揮して、一人一人が輝く発表に～　9/22

写生会（1年図工）～消防車を近くで見て、触って上手に描けたかな？　8/27

避難訓練（地震）～「大津波警報」で理科大へ全員が避難～　10/10

持久走記録会～目指せ自己ベスト、最後まで走り抜け～　9/3

歌声集会～中学生と歌声で交歓「中学生の歌声はきれいでした」～　10/12

アイヌ指導員による授業（総合的な学習の時間）～アイヌのことば・楽器・衣装に触れて～　9/4

縁を生かす

長万部中学校長
長谷川　秀雄

教師という仕事をしていると、様々な生徒、保護者、家庭と出会います。これらの出会いは、やはり「縁」というものだと私は考えます。この「縁」を大切にし、未来を切り拓いていく生徒たちの支援ができればと思っています。

先生が五年生の担任になった時、一人服装が不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪い所ばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生の記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良くでき、将来が楽しみ」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり疲れていて、教室で居眠りする。」後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力を振るう。」先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決め付けていた子が突然、悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。

放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？分からない所は教えてあげるから。」少年は初めて笑顔をみせた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手を上げたとき、先生に大きな喜びが沸き起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押し付けてきた。後であけてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていた物にちがいない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「あぁ、お母さんの匂い！」

今日は素敵なクリスマスだ」

六年生では少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。「先生は僕のお母さんのようです。そして今また出会った中で一番素晴しい先生でした。」それから六年、またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます。」

十年を経て、またカードがきた。そこには先生に出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕はよく五年生のときの先生を思い出します。あのまま駄目になってしまう僕を救ってくださった先生を神様のように感じます。医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任してくださった先生です。」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座ってください」と一行、書きそえられていた。